

紹介

『カミと人と死者』が目指したこと

富 樫 進

一

二〇一五年三月三十一日、岩田書院より『カミと人と死者』（以下、本書）が刊行された。

本書刊行の契機は、二〇一三年夏に東北大学大学院日本思想史研究室所属の学生を中心として開催された、同研究室主任・佐藤弘夫の還暦記念合宿である。紹介者は当時、同研究室助教として合宿の企画・運営に関与するとともに、本書の編集に携わることとなった。

このたび『日本思想史学』編集委員会のご厚意により、刊行の意図や達成点をふまえたかたちで本書の紹介をおこなう機会を与えられた。手前味噌な内容とならないよう、客観的な評価を心がけたつもりではあるが、編者としての立場からの講評ということもあり、無意識裡に行間へと染みこんだ「身内意識」

については、平にご容赦を願う次第である。

以下、目次に基づいて所収論文を示すことにする（括弧内は寄稿者名）。

はじめに——「体験としてのカミ」という出発点（富樫進）

思想史研究の転換——佐藤弘夫著『ヒトガミ信仰の系譜』の意義（和田有希子）

日本思想における死生観——韓国の巫教との対比を通して（成海俊）

「神明の舎」のありか——神は正直の「頭に宿る」のか、「頂を照らす」のか（片岡龍）

中世の春日信仰と死者供養——白毫寺の一切経供養儀礼と穢れをめぐる（船田淳一）

中近世移行期の村々における領主像——加賀国石川郡富樫郷を例に（永井隆之）

林羅山の死別体験（本村昌文）
勢至菩薩の示現としての法然——近世浄土宗学僧忍漱・義山

による伝記研究をめぐる（東海林良昌）

近世士道論と「私」（中嶋英介）
白虎隊の死と古典世界（末永恵子）

席次を争う神と人——近代における津軽顕彰を例に（鈴木啓孝）

近代と〈未来預言〉——仏教の滅亡をめぐる一八八〇年代の一論争について（オリオン・クラウタウ）

欽仰すべくして干犯すべからず——憲法学における天皇制理

解に関する一考察（石澤理如）

華津珍彦と英霊公葬運動（昆野伸幸）

刊行によせて（佐藤弘夫）

二

本書刊行の淵源となった合宿はその性格上、『死者のゆくえ』（二〇〇九年）『ヒトガミ信仰の系譜』（二〇一二年）といった佐藤の学問業績が起点であった。その結果、実行委員（小泉礼子・小嶋翔・島田雄一郎・松本学・村上麻佑子・若色智史）により、右の二書の問題提起や達成点を意識した「体験としてのカミ」という共通テーマが定められることになる。

拙稿「はじめに」でも述べたが、このようなテーマが設定された背景には、史料というかたちとしての〈記憶〉を用いることでしか過去の認識に触れることのできない現代人にとって、超越者たる〈カミ〉の实在感を学問的レベルで「体験」することが可能なのか否か、という問いを見出すことができる。天変地異やいくさ、疾病や老い・死といったライフサイクル上の様々な危機的状況からの超越を可能とする思想的営為に〈人〉と〈カミ〉との「非合理」な出会いからなる〈信〉の蓄積という側面を見出し得るとすれば、史料の厳密かつ合理的な解釈を大前提とする日本思想史学において、本質的な次元における歴史認識を過去と共有するには、いかなる方法が求められるのか

——紹介者はこの点に、実行委員が共同で掘み出した問題意識の本質が存在すると考えている。

和田論文によると、『ヒトガミ信仰の系譜』に集大成される佐藤の学問業績は、狭義の神・仏を含む「日本人にとって聖なるもの」としての〈カミ〉概念を設定することによって近世期に出自を有する仏・神、あるいは新仏教・旧仏教といった二項対立的構造を超越し、「冥・顕というコスモロジーの展開という、人類に普遍的な枠組みで検討する」という実践方法を探る点にその意義を求め得るという。和田の重視する「冥・顕というコスモロジー」については、佐藤自身も寄稿する池見澄隆編著『冥顕論——日本人の精神史』（法蔵館、二〇一二年）において、「顕界という地理的に限定された領域内に、「冥」という無限の性格をもつ超越的要素が拡大・波及し侵入・浸透したと信受される」「顕界からは不可視であり、しかも冥界からは常に透視されている」心理的視覚という定義づけがなされている。さらに、「その意味の解明はたとえば中世の人びとの想像的世界を内在的に理解し、追体験的にアプローチすることによって可能となる」とされ、「古代から近代、とりわけ中世を基本としながら、思想史・宗教・社会・民俗・考古・美術・言語の各方面から自由にかつ果敢に課題の解明」が試みられている（池見澄隆「序」にかえて——冥・顕論の地平）。

池見が〈冥―顕というコスモロジー〉の総体的理解に課題解明の重心をおくのに対し、「体験としてのカミ」というテーマ

は想像的世界の内在的理解や追体験的アプローチそのものにスポットを当てることで、一回的にして個別的な〈信〉の蓄積がいかにして〈カミ〉をリアルな存在へと変貌させるのかという点を明確化しようとする。「体験」という語を「人間を通して」という意味で理解するとき、〈カミ〉を信じるという営み、あるいは〈カミ〉との出会いを媒介とした自覚・自省のもつ意味を多角的に検討することは、すぐれて人文学的な意義を有する試みといえるのではないだろうか。

三

以上のような問題関心を共有しつつ、本書ではさまざまな題材や視点・アプローチをとる十三篇（はじめに」「刊行によせて」を除く）の論考を収録した。

紙幅の都合もあり、小稿ではすべての論考の内容について詳しく紹介する余裕はないが、「体験」としてのカミ」というテーマが本書においていかなるかたちで達成・結実したのかを示すため、本書における各論考の位置づけを紹介者なりの観点で、ごく簡単に示すことにする（前節で採り上げた和田論文を除く）。

前近代の日韓双方に認められる心に宿るタマ（霊）と頭に降臨するカミ（神）、その背後に存在するマクロコスモス（宇宙）とミクロコスモス（身心）といった照応関係の存在を明確化した片岡論文や、皇国史観に基づく大政翼賛と見なされる傾向にあった地域顕彰運動を国家的意思変革の可能性を含む人材育成

活性化の一手段として再評価する鈴木論文は、いずれも超越者としての〈カミ〉を主體的に捉え直す試みという点において、「体験」へのバクトルを指向する内容といえるだろう。また、領民の立場による戦国期の理想的領主像のあり方について論じた永井論文、法然への大師号加増を目的とする近世の法然伝研究の実態を明らかにした東海林論文、相次いで刊行された『仏教滅亡論』『仏教不滅亡論』を軸に明治初期の仏教革新運動について論じたオリオン論文、大日本帝国憲法における天皇の神格化の前提を明治・大正期の国法学・憲法学の展開に見出すとする石澤論文は、それぞれ超越者たる〈カミ〉像の受容のありかたを、政治的・信仰的・学問的な次元から明らかにしたものとして評価できよう。

本書で新たに加えられた〈死者〉というテーマについては、戊辰戦争における白虎隊の自決の〈物語化〉および史実からの乖離を追究した末永論文や、神道家・葦津珍彦の戦前期における思想と信仰および英霊公葬運動との関わりを明らかにした昆野論文が寄せられた。また、東アジア的観点に基づく日韓の死生観の共通点・相違点を指摘した成論文や、中世南都の神祇による死者救済の実態について論じた船田論文は、いずれも死者供養の儀礼を題材に〈冥―顕〉的世界観の明確化を目標に据えたものと評価できよう。一方、死別という〈体験〉に焦点を当てた研究として注目されるのが、実弟との死別を契機とした朱子学者・林羅山の老いと余命に対する自覚の深化を描き出

した本村論文、教訓書に採り上げられた「死」を目指す実践が、「自らのイエ、さらには仕える御家に対する名誉意識」を鼓舞することで奉公武士における死後の安心をもたらしたとする中嶋論文である。とくに本村は、前近代の伝統的な死生観と現代の医療・介護現場にて発生する老いや死をめぐる諸問題とを積極的かつ有機的に結びつける数々の試みを行っており（本村昌文「治療と臨床」『日本思想史講座5——方法』所収。ペリカン社、二〇一五年予定）、それらの成果は「体験としての〈カミ〉」というテーマを深化させるうえで示唆に富むものといえよう。

四

さて、問題ははたして本書がこれらの論考を総合・包括し得るテーマを発信することができたのかという点である。

もとより、それは個々の論考における問題意識および達成点とは直接関わりのない問題であり、本書全体を一貫するテーマを見出し得ない向きがあるとすれば、その原因はすべて編者たる紹介者自身の力量不足と怠慢とに帰結することとなる。ただ、言い訳めいた発言をお許し頂くならば、本書では一回的かつ個別的な〈信〉の蓄積というダイナミズムを重視する観点から、全体的なテーマに関わる条件をあえてゆるやかに設定したという事情も存在することを付け加えておきたい。

非合理的存在たる〈カミ〉に対する営みを、いかにして合理的に理解・評価するか。本書がカバーし得る範囲はまだまだ小

さい。本書の成果に対して忌憚なき意見が示されるとともに、本書および小稿を通じてこのパラドキシカルな難問を読者諸賢と共有することができるとすれば、望外の幸せである。

（東北福祉大学専任講師）